

2018 ASNET スタディツアー「台湾」報告書

東京大学公共政策学教育部

専門職学位課程 2年

内田 ひたき

9月26日、18時過ぎ。成田空港の到着ロビーは、出発のときと同じくらいたくさんの人でごった返していた。予定のプログラムを全て終え、それぞれ帰途につくだけの私たちは、人波からぼつんと取り残されたように互いに顔を見合わせた。日本に帰ってきた事実体がまだなじんでいないのに、秋を忘れるほどの台湾の暑さはすでに遠く恋しい。どっちつかずの宙ぶらりんな気持ちは、台湾での10日間という限られた時間の濃密さを私に教えてくれる。

台湾で法学を学ぶこのスタディツアーでは、現地の学生との共同セミナーのほか、検察署や裁判所見学、シンクタンク訪問など、さまざまに台湾を知る機会があった。どれもとても素晴らしいものだったが、この報告ではなかでも台湾の歴史と人権をテーマに、訪れた場所を振り返っていきたい。

1. 国家人権博物館・景美人権文化園區

……人・権・博・物・館？

ガラスケースの中に「人権」がすっぽりと収まっているところを想像したくなる、ふしぎな名前の博物館である。ひょっとしたらそこは「人権」を見ようとする多くの人で賑わっていて、展示室の前には長い行列ができていられるかもしれない。しかしもちろん、たとえば台湾が「宝島」だからといって、そんな夢のような博物館は残念ながら存在しない。私たちが「人権を見る」ためには、「人権がなかった」歴史を知るほかない。

景美人権文化園區は、台北の中心部から5kmほど南へ下ったあたり、新北市新店区に位置している。1945年、日本の敗戦によって台湾は国民党の統治下に置かれ、1947年の2.28事件を契機として、40年にわたる戒厳令の時期に突入する。この時代に正当な理由なく身柄を拘束され、裁判を受け、あるいは監禁された人々は「政治的受難者」と呼ばれる。この景美地区は、そうした「政治的受難者」の収容施設であった。

「人権がなかった」という歴史は、緑豊かで静かなこの博物館にあって、ただ展示されているだけではない、実際に起こった過去なのだ。私たちに語ってくれたのは、もうすぐ90歳になるという鄭慶龍氏である。「台湾民主自治同盟」に加入した、という身に覚えのない罪状で逮捕され、裁判とは到底呼べない裁判を経たのち投獄されたという。3年間にわたる「火燒島」（現在の「緑島」）での受刑生活がどのようなものだったか、釈放されたあと日本で長く仕事をされていたという鄭氏は、まるで私たちの本当の祖父であるかのようにゆっくりと優しい日本語を紡ぎ、私たちは島のパノラマを囲みながら静かに話を聞いた。



人権博物館をテーマにしたドキュメンタリーの作成中で、
私たちの見学の様子も一部撮影された。

2. 鄭南榕紀念館

地下鉄に沿ってまっすぐに伸びる「民権東路」を抜けて一本の狭い路地に入る。すき間なく並んだ建物はどれも同じくらいの高さで一様に曇り空を見上げていて、この中のひとつに、劇画的な歴史的一幕があったことをおくびにも出さない。紀念館の名前となった鄭南榕は、戒嚴令下の国民党の執政に反対して、言論の自由を唱えた人物であるという。アパートの一室に紀念館があるというのは珍しいと思いながら、狭い外階段を3階まで上がった。

入ってすぐのビデオルームを抜けると展示室があり、一際目立つのは右手奥の一角、ガラスの向こうには黒焦げになったむき出しの空間がある。清潔で明るい展示室に不釣り合いの、思わず目をそらしたくなるような焦げ跡は、かつてこの部屋で何が起こったのかをそのままに伝えている。鄭南榕が編集長を務めた雑誌『時代』も、その開明的な言論ゆえに、国民党による弾圧を免れることはできなかった。1989年、憲兵が彼の身柄を拘束するために建物に侵入した際、彼は当時編集部であったこの建物の一室に立てこもり、焼身自殺を選んで42歳の生涯を終えた。



若き日の鄭南榕と妻

彼には一人娘があり、名前を鄭竹梅という。残された妻と娘、また彼らを支えた多くの人の思いは2015年、ビデオレターにまとめられた。事件当時9歳だった娘の竹梅氏は、ビデオのなかで「なぜそんな最期を選んだの、どうして、叶うものなら聞いてみたい。」と一本の細い糸をつむぐように語った。カメラの前で静かに言葉を探すひとりの若い女性の淡い微笑みは、空間を切り裂くような黒焦げの残骸よりもずっと鮮烈な印象を残したまま、じつとりと湿った暑さを見下ろすように遠く高い秋色の空へと溶けていった。

3. 總統府

正面に立って眺めると、中心の塔を起点に横にまっすぐ伸びている屋根は、どこか東京駅に似ている。建物全体を上から見ると、漢字の「日」の形をしているのだという。この堅牢な建物は、日本統治時代の1919年に台湾総督府として造られた。現在も政治の中枢機関であり、「總統府」という名前の通り、総統がここで政務を執る。



總統府の模型

1階部分が展示室になっており、建物の歴史や總統府が果たすべき役割についてじっくり学べるほか、記念切手を売る小さな郵便局、總統と記念写真が撮れる特撮コーナーから現代アートの作品展示まで、親しみやすい企画も多かった。

順路に沿って進んでいくうちに、建物を上から見た「日」形の空白部分、すなわち建物の内側は、背の高い木に囲まれた明るい中庭になっ

ていることが分かる。ぐるりと庭を囲む回廊はやわらかな木漏れ日を受けて輝いており、向かい側の部屋まで見通せそうな開放的な空間は、訪れる人をどこかしら安心させる温かな魅力がある。

この總統府は、建物が作られた1919年当初、台湾で最も背の高い建物だったという。設計者の長野宇平治は、比較的シンプルなデザインを考案していたが、計画は変更され、中心の塔は予定よりも高く引き延ばすことが決まった。当時の日本が威信をかけて建設したこの台湾総督府にも、しかし、優しい木漏れ日の降り注ぐ回廊はすでにあったのだろう。100年間の建物の歴史を変わらない姿で受け止めてきた木漏れ日を写真にとじ込め、出口へと向かった。



中庭にて

4. 中秋節の夜に

9月24日は中秋節、台湾では祝日である。私たちも23・24日は自由観光の時間で、2日間は言うまでもなくあっという間に過ぎていった。故宮博物院で人気だという「翠玉白菜」と「肉形石（ひとかたまりの豚の角煮のようなものだ）」を眺める列に必死で並んだり、台北101の展望台に上って台北の夜景を眺めたり、台湾での3連休を、現地の人に混ざって楽しむことができた。

なかでも特に印象に残っているのは、輔仁大学との交流会で仲良くなった学生が、バーベキューに招いてくれたことである。中秋節の夜には、家族が集まってバーベキューをするのが恒例になっているという。観光学部の4年生になったばかりだという彼女は、今年の夏に出雲大社近くの旅館でインターンシップに参加したといい、日本語でのキャンパス案内を買って出てくれていたのである。

「おばあちゃんの家で毎年集まるの、あの家には屋上があるから。予備校が一緒だった友だちも誘って、だから、ぜひ来て」

新台北市にあるという彼女のおばあちゃんの家は、台北駅からバスで20分ほどのところにあった。幅の広く、それでいて曲がりくねった道をバスはゆっくりと通り抜けていく。決して人通りが多いわけではないが、それでも街が土地に根差していて、しっかりと呼吸しているように感じられたのは、小さな商店が道の両側に軒を連ねているからなのだろうか。

たどり着いた彼女の家は、中秋節だからなのだろうか、親戚一同で賑わっているらしく、さながら大家族だった。細長い階段をまっすぐに上っていくと、屋上ではもうバーベキューの用意が整えられていた。

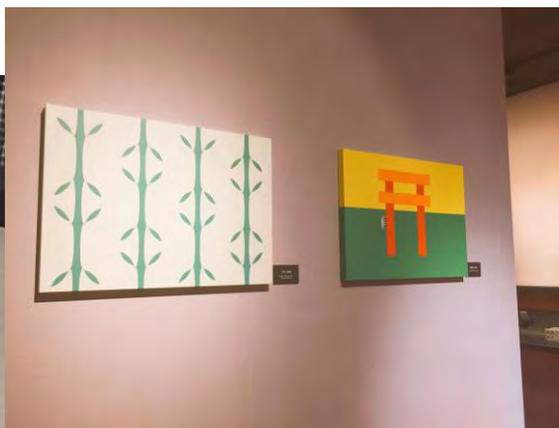
広い机の上には、山ほどの豚肉やソーセージ、トウモロコシ、食パン、それと真っ赤で大きな海老・海老・海老……ありとあらゆる食材がどっさりと積まれている。机の前には、彼女の従妹であるという9歳の女の子が座っていて、お母さんと一緒にエリンギと豆腐を竹串に通している。奥の方では、大学生らしき人が何名か、楽しそうに談笑しながら炭火の準備をしているのが見えた。みんな予備校時代の友だちなもの、この人とこの人は私の友だちで、そこにいる彼はそのボーイフレンド、彼は全然英語ができないの、でもまあ、英語で話しかけてみてよ、と彼女は矢継ぎ早に紹介してくれた。

私たちはとりあえず、女の子を手伝うことにした。山ほどのエリンギと豆腐を手に取り、落ちないように竹串に通していく。じつりと熱い夜の空気を感じながら、無心になって作業に没頭した。そうこうするうちに「焼けたわ」という声があり、見るとお皿にはお肉ととうもろこしがいっぱい盛られていて、あとはもう、てんやわんやの騒ぎだった。

焼きあがった海老をほおぼりながら、たどたどしい中国語とカタコトの英語を駆使して、私たちは少しずつお互いのことを知り、気づけばもう何年も前から友だちでいるかのように笑い合っていた。

台湾での10日間、初めて訪れた場所とは思えないくらいに、どこか懐かしく、くつろいだ気持ちで過ごすことができた。10日間を一緒に過ごした東大の皆や、私たちを温かく迎

えてくれた台湾の学生たち。いつか再会するときは、たとえ何年後であっても、まるで昨日会ったばかりかのように打ち解けられると確信できる、多くの友人に巡り合ったことは本当に嬉しい。「ふるさと」という言葉がこんなにも似合う場所を、私は台湾のほかにもまだ知らない。今回台湾で感じたような温かさ、親しさを、これから先、いまだ知らない土地を訪れるときにも見つけていくこと、「ふるさと」のように感じられる場所へと増やしていくことを、今後の目標としたい。



(写真、左上から

- ①大陸でも話題の台湾発のショッピングセンター「誠品生活」
- ②バブルワッフルとマンゴーかき氷
- ③故宮博物院で人気の「翠玉白菜」と「肉形石」
- ④故宮博物院の展示、目の錯覚を利用した現代アート
- ⑤中秋節のバーベキュー)



ASNET スタディツアー「台湾研修」報告書

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 興石幸之介

立法院中南部服務中心-議政博物館-

ここでは、台湾の五権分立に基づく立法権の最高機関である立法院のはたらきや、歴史に関する紹介を受けた。事前に授業を通じて、台湾における民主主義の実践に関して、同性カップルに法的権利を認めるいわゆる同性婚といったトピックについて学んでいたものの、実際に台湾を訪れ、議政博物館等の施設を見学する中で、民主主義との関連で第一に注目したのが台湾原住民（現地での呼称を踏まえ本文では台湾原住民とする）についてである。

台湾にはそもそも、漢民族が移住してくる以前には台湾原住民とよばれる先住民族が暮らしていた。台湾にはいまだに多くの原住民が暮らしており、伝統を守りながら生活を送る者、都市へ出て行く者など様々である。議政博物館での説明で興味深いと感じたのは、台湾原住民に立法院の議席が 113 議席中 6 議席与えられているという点である。台湾では立法院に議席を割り当てることにより、原住民の権利を守る制度を構築したのである。同じアジアの隣国である日本でのアイヌ民族をはじめとする少数者問題との比較、検討を行うと興味深いテーマとなるように感じた。



実際に博物館で見た立法院議員の集合写真においても、原住民族の衣装を身にまとっている議員を数名見ることができる。

議会の多様性は、原住民への議席割当のみならず、比例代表候補者を男女同数にしなければならないといった制度によっても支えられている。

写真を見る限りでも、日本の国会と比較して女性の割合は明らかに高いといるだろう。



議政博物館でもう一点興味深かったのは、多くの展示で外国との交流が強調されていたことである。これは、大陸の中華人民共和国と中華民国台湾との緊張関係の中で、台湾を「一人前」の国家のように扱った証拠として展示されているのではないだろうかと感じた。日本からの展示品ダルマも「日本必勝達磨」として紹介されていた。



左は、議政博物館における展示の一つ、世界地図の中の南米の国家に関する紹介である。台湾は中米や南米の諸国家と比較的つながりが深く、実際に展示されている品の中にも中南米から寄贈された品が多かった。もっとも、近年では台湾と断交し、中華人民共和国とつながりを深めるといった選択を取る国家が増加する中で、議政博物館の世界地図は変化していくのか、興味が湧いた。

さらに議政博物館では、議員それぞれのプロフィールを閲覧することができ、大学卒、博士号取得者、女性、男性など機械を操作することで様々なカテゴリごとに立法院の議員の属性を知ることができるシステムが存在していた。さらに、各議員の立法院での発言がビデオで閲覧できる機械も設置しており、誰でも立法院での議論を身近に感じとることができるようになっていた。これは、台湾の人々の立法院議員に対する注目の高さを示しているシステムといえる。台湾での研修においては、台湾の大学生と交流する機会も多くあったがその中で特に驚いたのは、台湾の大学生にとって政治的意見を発表することは普通である、という点であった。立法院周辺における若者のデモは数多く、2014年には議場内を学生が占拠するといった事態も発生したという。台湾の人々は一般的に言って、自身が有権者であるという意識を強く持ち、自身の住む台湾をどのような方向へと導いていきたいかというビジョンを有しているように思う。議政博物館での展示は台湾での民主主義について考える良いきっかけとなった。

国立台湾工芸研究発展中心

ここでは台湾の工芸品制作の現場で、木工、漆塗り等のプロから実際にお話を聞きながら見学を行った。研修団が一番心を惹かれていたのは、葉の葉脈を生かして染色した薔薇の花であった。自然素材でできているからこそ、くしゃくしゃに折ってしまっても水をかければ元に戻るという極めて興味深い作品であった。職人は、自然の素材を生かしながら作品に「新たに命を吹き込む」作業を行っていると話していた。



琴に漆塗りを行う若い職人の図。台湾工芸研究発展中心では、一流の職人たちが自分で制作活動を行うのみならず、若手の職人の育成も行っており、まさに台湾工芸の「発展」を目の当たりにすることができた。

台湾における工芸品では、個人的に注目していたものがあつた。それは台湾原住民が製作した作品である。台湾原住民の作品には多くの場合「何族」による「どんな意味」が込められている作品であるのかという説明書きが記載されていた。研修中、少なからず台湾原住民によって製作された作品が販売されている店舗を目にすることがあつた。そして、台湾原住民の作品を目にしたのは、必ずしも台湾原住民にフォーカスを当てた店舗ではなく、総統府の中の売店や、蒋介石官邸内の売店等であつた。なぜ、台湾原住民と一見関係ない店舗で台湾原住民の作品を販売するのか疑問を持っていたところ、研修最終日、桃園空港の第二ターミナルを偶然利用した際に見かけた「台湾發源地」という台湾原住民の作品を多く販売していた店舗で店員と話をする中で、「台湾原住民の文化は台湾固有の文化で、台湾をユニークたらしめる」ものであるという発言を聞くことができた。まさに、総統府や蒋介石官邸といった「台湾らしい」場所で「台湾らしい」原住民の作品を販売することの意味を理解できたように思われた。



上記桃園空港内「台湾發源地」で購入した小物入れ。鮮やかな色合いと独特のパターンが非常に特徴的である。価格は250元と同様の小物入れと比較すると少し値段が高い。台湾国内には、台湾原住民の手作り作品を制作、販売する会社はいくつか存在しており、外国人観光客のみならず地元の台湾人にも人気を集めているようである。

国史館台湾文献館

国史館においては、豊富な展示資料を見学しながら台湾の歴史について概観した。しかし、特に興味を惹かれたのは案内を行ってくださったガイドの男性についてであった。男性は「小学 3 年生まで日本語」で教育を受けていたと言い、案内では日本語も交えながら台湾の歴史について紹介を行っていた。

台湾に渡航して衝撃を受けたのは街中で見かける日本語の量であった。「ラーメン」はもちろんのこと、「マッサージ」「タピオカ」「こきゅうはくぶつ いん いき」とさまざまなものに日本語表記がみられた。これらは日本人観光客の多さによるものであると考えることができるが、必ずしも日本人向けでないものにも当たり前のように日本語が入り込んでいる様子も目にすることがあった。



高雄市で見つけたトラックに記載してあった「沖水椅の専門家」。このように台湾における日本語表記で最も目にするのが「の」であった。これは意味を表すというよりはのという文字をデザイン的に挿入していると考えられる。

台湾に渡航してさらに驚くのは日本との繋がり深さである。それは、国史館を案内してくださった男性が日本語教育を受けていたということに代表されるように、かつて台湾が日本の植民地であったというところによるものが大きい。台湾各地で日本時代に建てられた建造物を目にすることも多い。



日本時代に建造された建造物は總統府をはじめ有名であるが、日本であまり知られていないが台湾で非常に有名なものは八田與一による水利設備である。

左は国史館に展示されていた八田與一の像。八田が建造した水利設備は台湾南部の発展に多大な功績を果たしたものとして評価されている。日本時代のさまざまな記憶

は台湾の人々の中で生き続けている。

しかし、ここで忘れてはならない点は、日本時代の記憶には暗い過去も含まれているという点である。国史館でも、台湾原住民を日本が多数殺害した霧社事件や、大規模な抗日放棄であるタパニー事件についての紹介があった。以上のように、台湾の「国史」を語る中で日本時代は大きな影響をもたらしたものとして捉えられているのである。日本と台湾との繋がりはこのような歴史的背景から生み出されたものであると実感した。

総括 - 「近くて近い国」 -

日本ではしばしば近隣の東アジア各国のことを「近くて遠い国」と呼ぶことがある。これは、地理的には近いものの歴史的な背景から国民感情が遠いということを表している。私が台湾へ渡航して感じたのは、台湾は「近くて近い国」であるのではないかという点である。地理的な近接性はもちろんのこと、街を歩けば日本でも当たり前に見えるファストフード店、コンビニエンスストアを目にし、レストランで注文に迷えば店員はすぐに日本語に切り替える、など自分が「外国」にいるのか分からなくなるほどの経験が多数あった。



台北 101 から見た台北市街と中秋の月。

大学生をはじめとして台湾の人々とお話をする機会もあったが、多くの方から「日本が好き」と声をかけていただいた。このような経験から私は今回の台湾研修で台湾のことを非常に身近な「近くて近い国」と感じている。しかしこれは、日本と台湾が似ているから日本の考え方をそのまま台湾に当てはめて考えれば台湾を理解できるという意味を表しているわけではない。私は、むしろ、似ているからこそ、相違点の原因は何であるのか、台湾から何を学ぶことができるのか、といった姿勢で台湾のことについて学ぶことが大事なのではないかと感じている。例えば上記したように台湾では若い世代が政治活動を行うことについて積極的であるが、この点は日本の学生世代と大きく異なる点として指摘できる。台湾の人々の有権者意識の強さはどこから来るのか、といった一つのトピックを取っても台湾から多くの示唆を得ることが可能であろう。

台湾研修での日々は、台湾についてもっと深く学びたい、台湾の人々と知り合いたいと考える大きなきっかけを与えるものであった。研修の終盤に訪れたシンクタンクで「日本と台湾の若い世代が交流することが両国の関係に重要である」というお話を伺った。私も「若い世代の交流」に寄与できるよう研修で出会った台湾の学生たちと交流を持ち続けたい。そして、ぜひとも「近くて近い」台湾をふたたび訪れたいと考えている。

はじめに

今回の台湾研修は、私にとって初めての東アジアへの渡航であった。また、スタディツアー形式で海外へ渡航するのは3回目（1回目はインドネシア、2回目はタイ）であったが、法律・政治面の学習が中心となるものは今回が初めてであった。このように2つの点で新しい経験が出来たことは、視野を広げることに役立つものであったと考えている。

本レポートでは、前半部で筆者が特に印象に残った9月20日の研修（立法院中南部業務センター、国立台湾工芸研究発展センター、国史館台湾文献館の3ヶ所の訪問）について簡潔な報告を行い、後半部で台湾の食について、筆者が現在修士論文で取り組んでいるハラール認証制度と関連させてコメントする。

1. 9月20日の研修についての簡潔な報告

9月20日の研修は、プログラムの中で唯一法律がメインではなく、政治および文化面が中心となるものであった。学部時代に政治学を専攻し、現在修士課程において文化人類学を学んでいる私にとっては、この日の内容が最も興味をそそられるものであった。したがって、本レポートでは9月20日の内容を中心に振り返ることとする。

午前中に訪問したのは立法院の台中支局にあたる場所であった。この敷地内に立法院議政博物館があり、台湾の議会について分かりやすく学ぶことができる。到着後すぐに、10分程度で立法院の概要を説明したビデオを鑑賞した。その中で、各選挙区ごとに均等に議席を割り振っていること、女性議員も半数近くいることなどを学んだ。その後、記念品の贈答を経て、博物館の中を見て回り、台湾の立法についてさらなる理解を深めた。展示にはさまざまな工夫がなされており、例えばタッチパネルで議員の議会での発言を取めた映像を検索できたり、電球で台湾を国家承認している国を照らした地図を展示したりしていた。電球自体はあるものの、電気が点いていない国もあり、それは開館当時は台湾を国家承認していたものの、その後取り消した国という意味である。台湾の複雑な外交事情を垣間見た瞬間であった。

昼食後はまず国立台湾工芸研究発展センターを訪問した。時間の都合上、全ての展示スペースを見ることはできなかつたため、木の枝を用いた工芸作品で有名な芸術家の創作パフォーマンスと、漆塗り教室の2つを鑑賞した。前者では実際に造花を作る過程を見学した。木の繊維に逆らわず、水を含ませながら自由に加工していく様子は圧巻であり、パフォーマンス後には完成品の造花を土産に購入する研修参加者が相次いだ。

後者では生徒が琴の胴体部分に漆を塗っていた（写真1参照）。琴という長い楽器に、ムラが出ないように丁寧に漆を塗っていくのは傍目から見ても難しそうであった。また先生が完成品の琴を使って、日本の曲を演奏するというサービスもあった。私にはその「日本の曲」が何かは判別がつかなかったが、見学者を一生懸命もてなそうという工芸発展センター側の思いに感謝しながら演奏を拝聴した。

工芸発展センターでは他にも、日本との繋がりを示すものが見られた。日本が3.11の被害に見舞われた際、台湾が日

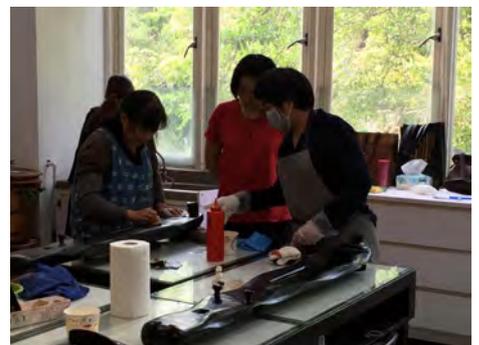


写真1：漆塗りを教わる生徒（筆者撮影）

本に対して多額の支援を行った¹ことは記憶に新しいが、3.11で甚大な被害を受けた福島から返礼として寄贈された工芸作品が、センター内の目立つ場所に展示されていたのは印象的であった。隣には同種の台湾の工芸作品も並置されており、このことのみで「台湾は親日である」という言説を安易に主張することは出来ないものの、少なくとも政治・経済に留まらないソフトな面が、日台関係を良好なものにしてゆく一要素であることは言えるだろう。

そして最後に国史館台湾文献館を訪問した。訪問して早速学んだことがあった。入口に2体の獅子像があり、左右で性別が分かれている。右側がオス、左側がメスで、建物に出入りする際はオス側から入り、メス側から出るのが決まりだそうだ（写真2、3参照）。日本の神社にも狛犬があるが、性別や出入りの方向にまで気を配ったことは無かった。今後日本で同様の像を見かけた際には、その意味合いに注意して観察してみようと思った。



写真2：入口左側のメスの獅子像（筆者撮影） 写真3：入口右側のオスの獅子像（筆者撮影）

中に入ると、台湾の歴史を概観することができた。特に私の興味を引いたのは台湾の先住民族であった。台湾の東部には多くの先住民族が住んでおり、日本でもそのいくつかは知られているものであった。例えば、1996年アトランタオリンピックのテーマ曲には、アミ族が歌う曲がサンプリングされていた²。他には2013年に、日本統治時代にセデック族が日本軍に対し抵抗運動を起こしたという史実に基づいた映画「セデック・バレ³」が公開され話題になった。私は事前学習の段階でこの映画のことは知っていたものの、実際に鑑賞することは無く研修に参加した。研修参加者の中には映画を鑑賞したことのある人もおり、感想を尋ねてみると、映画の中ではセデック族が日本軍を圧倒する様子が強調されているが、実際は日本軍がセデック族を巧妙に追い詰めて壊滅させており、やや誇張が見られるという。私はこのことを聞いて、日本が植民地支配時に台湾に対して行ったことを改めて学習しなければならないと感じた。

以上の通り、9月20日は台湾の歴史・文化を大いに学ぶことが出来た有意義な1日となった。

¹ 西日本新聞（2017年3月21日）「東日本大震災へ台湾から250億円の義援金「なぜ？」 台湾地震に救助隊派遣した日本への「恩返し」 台北在住の作家「アリガト謝謝」出版」<https://www.nishinippon.co.jp/feature/attention/article/316827>、2018年10月9日最終アクセス。

² Billboard Japan「ディファン [郭英男]「Circle Of Life」」<http://www.billboard-japan.com/goods/detail/2403>、2018年10月9日最終アクセス。

³ 映画『セデック・バレ』公式サイト <http://www.u-picc.com/seediqbale/>、2018年10月9日最終アクセス。

2. 台湾の食：ハラール・フードはどこで食べる？

本章では、私が自由行動日（9月24日）に立ち寄った料理店を手掛かりに、私が現在修士論文において取り組んでいるハラール認証制度と台湾の関係について言及する。

私は台湾研修において1つ、考えてみたいと思っていた問いがあった。台湾でもイスラームは一定の地位を占めている⁴とは言うものの、マイノリティであることは疑いなく、台湾のムスリム（イスラーム教徒）はイスラームの食規定を守って生活することが出来るのだろうかというものである。今回の研修では高雄、台中、台北と台湾全土を縦断したが、私は自由行動で食事を済ませる際に、常に「ムスリムが食事をする場所はあるだろうか」と模索してみた。

イスラームにおいて許されたものを意味するアラビア語が「ハラール (حلال)」であるが、この中国語訳は「清真 (qingzhen)」とするのが一般的である⁵。中国語圏でハラール・フードを探す際は、上記の漢字もしくはアラビア文字を掲げている店を見つけることが近道となる。

高雄と台中ではそのような店を見つけることは出来なかった。私は修士の研究の中で、中華文化では豚を食べることや飲酒がアイデンティティ形成に繋がると述べた論文⁶を読んだことがあったが、それを実証するかのように、多くの店は豚肉や酒を看板メニューに掲げていた。高雄大学の学生との交流時に「清真料理店を知っているか」と尋ねてみたものの「見たことがない」と返答され、台湾中南部はムスリムが食を求めるのが困難であるように思えた。

ただし「ハラール/清真」とは銘打っていないものの、ムスリムが入ることが可能と思われるレストランは時折見かけた。それは「素食」と呼ばれる仏教僧向けの精進料理の店である。イスラームにおいて、野菜に関しては特段の禁忌がない。素食料理店は仏教的関心と健康的関心の双方から客を取り込もうとしていると考えられるが、期せずしてムスリムが安心して食事が出来る場所を提供することにも繋がっている。日本でも2020年東京オリンピックを控え、ムスリムへの食の対応が叫ばれているが、後述するハラール認証を取得したレストランだけでなく、ヴィーガン・レストランも主要なアクターになる可能性がある。

台湾研修に話を戻すと、台北で私が清真料理店を見かけたのは9月24日の昼のことであった。その日は自由行動日であったため、私はホテル近くのコインランドリーへ洗濯に向かっていて、通りをどことなく眺めていると目に入って来たのは「Certified Halal Food」の文字（写真4参照）。探し求めていたものがようやく見つかった瞬間であった。

洗濯を終えてホテルに戻った後、同じ部屋の友人を誘ってその店で昼食を食べに出かけた。店頭にはヒジャーブ（頭部を隠すスカーフ）を付けた女性が立っており、中に入るとお昼時ということもあってか、ほとんどの席が埋まっていて繁盛していた。客層はヒゲ



写真4：台北駅近くの清真料理店の看板（筆者撮影）

⁴ 台湾交通部観光局「宗教信仰」<https://jp.taiwan.net.tw/m1.aspx?sNo=0003009>、2018年10月9日最終アクセス。

⁵ Sai, Yukari and Johan Fischer (2015) 'Muslim food consumption in China: between qingzhen and halal.' Florence Bergeaud-Blackler, Johan Fischer and John Lever (eds.) "Halal Matters: Islam, Politics and Markets in Global Perspective." London and New York: Routledge. 160.

⁶ Fischer, Johan (2015) 'Halal training in Singapore.' Florence Bergeaud-Blackler, Johan Fischer and John Lever (eds.) "Halal Matters: Islam, Politics and Markets in Global Perspective." London and New York: Routledge. 180.

を生やしたムスリムらしき男性もいたが、自分たちのように牛肉麺や羊肉麺を求めて食べに来た非ムスリムと思われる客の方が多い印象を受けた。



写真5：筆者が食べた羊肉麵（筆者撮影）



写真6：店頭に掲げてあるハラール/清真マーク（筆者撮影）

メニューの種類は豊富であり、牛肉麺・羊肉麺の中でも、私が食べたようなあっさりとした味付けのもの（写真5参照）、友人が注文した醤油ベースの濃い味付けのもの、他にも汁なしのものなどがあつた。トッピングも値段を増すごとに様々なものを注文することが可能で、近くに住んでいれば何度も足を運びたくなるような仕掛けであると感じた。なお、通常サイズの値段は1杯130～140台湾ドル（約500円）程度で、他の非ムスリムの店で食べる中華麺や日本式ラーメン（80～90台湾ドル）よりやや割高である。

単価の高さの原因の1つと考えられるのが、メニューがハラールであることを認証機関に認証してもらうために、手数料を支払っていることである。この店は中国回教協会からハラール/清真認証を受け、マレーシアのイスラーム団体PERKIMから推奨を受けているようだ（写真6参照）。中国回教協会は、1938年に重慶で設立された「中国回教救国協会」を母体とし、1949年に国民党とともに台湾に渡った後は、台湾のムスリム団体としての役割を果たしている⁷。なお、現在の中華人民共和国において認証を実施しているのは中国イスラーム協会と呼ばれる別の団体であり⁸、ハラール認証の次元においても台湾と本土の断絶があることを改めて思い知らされた。

市街地で見かけたものは結局上記の1件のみであったが、帰国日に桃園国際空港で土産購入や軽食をしていた際には、国際的な場ということもあって対応が行き届いている様子を観察することが出来た。例えば、とある土産店の一角にはハラール/清真コーナーがあつた（写真7参照）。並んでいた商品は認証を取得しているものとは限らず、アルコールや動物由来の成分を含んでいない食品であれば置いているようであつた。ハラール認証制度の問題点として、「ムスリムはハラール認証を受けた食品しか食べられない」という誤解を生むという指摘がある⁹が、この土産店の取



写真7：桃園国際空港の土産店のハラール/清真コーナー（筆者撮影）

⁷ 長谷部茂（2014）「台湾海峡を渡った中国ムスリム—台湾のイスラーム世界」『拓殖大学イスラーム研究所ニューズレター』Vol.11 No.4、3頁。

⁸ 任仕任（2014）『中国ハラール食品市場の現状と課題～ハラール認証問題を中心に～』一橋大学国際・公共政策大学院公共経済プログラムコンサルティング・レポート（<https://www.ipp.hit-u.ac.jp/consultingproject/2014/CP14Nin.pdf>よりダウンロード可）、22-23頁。

⁹ 阿良田麻里子（2018）『食のハラール入門：今日からできるムスリム対応』講談社、49頁。

組みは、認証制度によって陥る視野狭窄を乗り越えるヒントとなるかもしれない。他には、搭乗ロビー近くの軽食店は「Halal Food」としてカレーやサンドイッチなどを提供しており、中国語、英語に加えてアラビア語でもメニューを表示していた。私は以前、授業の一環で日本のハラール認証について調査したことがあるが、その際に東京のモスクで認証事務を担当する日本人ムスリムが「日本の企業は認証を取得する前に、滞日外国人ムスリムでも分かる言語で成分表示をする工夫が出来るはずだ」と発言していたのを覚えている。桃園国際空港の所々で見かけたムスリムへの気遣いの態度は、隣国の日本も大いに見習うべきであると考えている。

おわりに

今回の台湾研修は、プログラムの中で台湾の法律や政治を学び、自由行動の中で参加者が台湾について関心を持ったテーマ（私の場合はムスリムの食）について探索できるという、非常にバランスの取れたプログラムであったように思う。研修に参加して、台湾は法や制度といったハードな面で日本との相違が多く見られることが分かり、それを現地の学生と議論するのはとても興味深かった。また博物館などで知ることが出来たソフトな面も、多種多様な先住民族をはじめ魅力あるものの連続であった。研修参加者の中に台湾が複数回目であった人が一定数いたのも頷ける。

最後に、このプログラムを企画して下さった徐先生、後藤先生、戸谷先生、児玉先生、孫先生、および現地で私たちの訪問を快諾して下さった皆様に心より感謝の意を申し上げる。

参考文献

- 阿良田麻里子 (2018) 『食のハラール入門：今日からできるムスリム対応』 講談社。
- Billboard Japan 「ディファン [郭英男] 「Circle Of Life」」 <http://www.billboard-japan.com/goods/detail/2403>、2018年10月9日最終アクセス。
- 映画『セデック・バレ』公式サイト <http://www.u-picc.com/seediqbale/>、2018年10月9日最終アクセス。
- Fischer, Johan (2015) 'Halal training in Singapore.' Florence Bergeaud-Blackler, Johan Fischer and John Lever (eds.) "Halal Matters: Islam, Politics and Markets in Global Perspective." London and New York: Routledge. 175-191.
- 長谷部茂 (2014) 「台湾海峡を渡った中国ムスリムー台湾のイスラーム世界」 『拓殖大学イスラーム研究所ニューズレター』 Vol.11 No.4、2-3頁。
- 任仕任 (2014) 『中国ハラール食品市場の現状と課題～ハラール認証問題を中心に～』 一橋大学国際・公共政策大学院公共経済プログラムコンサルティング・レポート (<https://www.ipp.hit-u.ac.jp/consultingproject/2014/CP14Nin.pdf>よりダウンロード可)。
- 西日本新聞 (2017年3月21日) 「東日本大震災へ台湾から250億円の義援金「なぜ？」 台湾地震に救助隊派遣した日本への「恩返し」 台北在住の作家「アリガト謝謝」出版」 <https://www.nishinippon.co.jp/feature/attention/article/316827>、2018年10月9日最終アクセス。
- Sai, Yukari and Johan Fischer (2015) 'Muslim food consumption in China: between qingzhen and halal.' Florence Bergeaud-Blackler, Johan Fischer and John Lever (eds.) "Halal Matters: Islam, Politics and Markets in Global Perspective." London and New York: Routledge. 160-174.
- 台湾交通部観光局「宗教信仰」 <https://jp.taiwan.net.tw/m1.aspx?sNo=0003009>、2018年10月9日最終アクセス。

ASNET 2018 年度台湾スタディーツアー 活動報告

東京大学大学院 学際情報学府
文化・人間情報学コース
修士課程 濱中麻梨菜

2011年の東日本大震災の際、世界中の国々に先駆けて、台湾が日本への支援を行ったことは記憶に新しい。そこには、単に地理的に近隣の国であるということ以上に、台湾の日本への高い関心がうかがえる。こうした台湾と日本の関係、今後の方向性はいかにあるべきか。また、私たちはそれにどのような姿勢で向き合うことが可能なのか。今回のスタディーツアーの活動報告に際しては、そのような観点から自らの経験や学んだことを記していく。

今回のスタディーツアーでは、自身の所属する東京大学の学生と、法学を学ぶ他大学（佐賀大学、琉球大学）の学生と行動をともにした。実際の活動においては、立法・行政機関への訪問をはじめとし、人権をめぐる歴史に触れたほかにも文献館や工芸館も訪れ、台湾における法制度のみならず歴史・文化についても知見を深める機会となった。中でも、日本・台湾の学生交流として、高雄大学法学院、輔仁大学法律学院、台湾大学法律学院での学生共同セミナーに参加し、日本と台湾の学生が互いの意見を交換し合ったことは、相互理解を深める一助となった。以下では、台湾の人々との交流をテーマとして、今回のスタディーツアーを通じて学んだことを述べていく。

まず、スタディーツアー開始後すぐに実施された高雄大学法学院での学生共同セミナーでは、日本側からは佐賀大学と琉球大学、台湾側からは高雄大学のそれぞれから数名の学生によって報告が行われ、それに対する質疑応答という形で日本と台湾の学生の意見が交わされた。報告者の扱うテーマは、戦後世代の戦争責任といったものから現代社会における同成婚の現状というものまで、広い時間軸のなかで扱われるものであったが、そこで行われた議論は、決して法規範の枠組でのみ語られるような閉じたものではなく



▲高雄大学法学院にて

現代を生きる人々と法律の連関的な関係性に着目したものであり、実社会を生きる人々に広く開かれたものであった。そうした議論への参加によって、単に日本と台湾という異なる社会文化的環境を生きる者同士で意見を交わしたということにとどまらず、相違があるなかでも互いの共通項を導き出し、そのうえで実際の社会事象に対して目を向けていくといった、国際社会に生きる者としての視座を養う契機ともなった。

次に行われた輔仁大学法律学院での学生共同セミナーにおいては、同様の形式をとりつつも、法律の具体事例を参照した報告や、20世紀後半の清朝の法制度をめぐる一連の論争を取り上げた報告、翻って、現代の夫婦別姓を取り上げた報告などがあり、学生の関心の幅広さを感じた。特に輔仁大学学生からの清朝末期の礼法論争をめぐる報告が、興味深かったものとして印象にある。同報告は法制度の変化を社会や規範意識の変化と関連付けて捉えたもので、法学に比較歴史学的視点を取り入れた印象を受けた。何を刑法の対象とするかという規範意識とそれに基づく法制度が、社会の変容とそれを要請する外的圧力によって変化したという問題背景は、地域的特性という枠組みを超えて考慮する必要があると感じた。



▲輔仁大学の学生共同セミナーでの報告の様子



▲輔仁大学の学生（中央）と記念撮影

訪問先として三つ目となる台湾大学法律学院では、その沿革や歴史、組織などに関する説明を受けた後、質疑応答の時間が設けられた。台湾の大学でトップに位置する同大学の法律学院が、どのような特色を持ち、どのような学びを得られる場なのかということにとどまらず、学問と向き合う姿勢に関する見識に至るまで、様々な意見を交わすことができた。セッション終了後には台湾大学の学生によるキャンパスツアーが行われ、学生生活に励む実際の学生の姿を横目に見つつ、広大なそのキャンパスを散策した。

▼台湾大学キャンパス見学の様子



今回のスタディーツアーでは学生共同セミナーを中心に台湾の人々との交流の場が設けられ、互いの意見を交わす機会に恵まれたが、上記のセミナーとは別に、シンクタンクである台湾世代智庫でのディスカッションも、日台関係と昨今の情勢についての議論の場となったという意味において、強く印象に残っている。台湾の抱える歴史、すなわち日本による統治と長期に渡る国民党政府による支配が行われていたことは、大きな時間軸の中で、また、現代に生きる私たちにも繋がるものとして認識する必要がある。そうした諸問題について考える力を養うためにも、日本と台湾における国

際関係のなかでの位置や、歴史認識問題などについて、日ごろから自発的に疑問を持ち、学んでいこうとする姿勢が求められるのだということを改めて実感した。そのような視座の重要性を感じたことは、学生一人ひとりにとって貴重な経験となったと考える。

上記のような活動の合間には自由行動時間が設けられ、実際の台湾の街や人々に触れる機会が多々あったことは、自身の視野を広げる良い機会となった。中でも、輔仁大学法律学院の学生セミナーの際に知り合ったある女子学生との出会いは、私にとって大変貴重なものとなった。台湾では九月に中秋の名月を祝う慣習があり、満月となる三日間は家族や友人でバーベキューなどをするということで、彼女が個人的にそのバーベキューに誘ってくれたのである。私たちが滞在していた台北市の隣にある、新台北市内の彼女の祖父の家に招かれ、彼女の家族や友人が集まる中、私ともう一人の東京大学の学生で参加させてもらった。

台北駅から3人でバスに乗り15分ほどで最寄りのバス停に到着すると、小さな飲食店が道路の両側に並ぶ道に出た。彼女の案内とともに住宅の並ぶ路地に入ると、さらに細い小道を曲がり、所狭しに密集する住宅の一角に彼女の祖父の家があった。緑色の鉄格子の門を開け、ビルのような構造に見える住居内に足を踏み入るとすぐに階段が見え、それを上っていくとリビングに出た。テレビを囲むようにソファが配置されたその部屋には、彼女の祖父母、両親に加え、何人かの親戚の方々が集っていた。彼らは満面の笑みで私たちを出迎え、日本語で「こんばんは」「よろしく」などと声を掛けてくださった。彼女の祖父母は、以前は日本語を話すことができたらしく、現在はほとんど忘れてしまったということだったが、それでも日本語を聞いた際にはいくつか知っている単語が聞き取れて、懐かしく感じるということだった。

肝心のバーベキューは屋上で行われており、大人数だったため3つに分かれてそれぞれ食材を焼いていた。私たちは彼女の従姉妹や友人の集まっていた一角に案内され、そこでバーベキューに加わった。甘辛いソースで味付けされた豚肉、名物だという台湾ソーセージ、海老、さつま揚げ、エリンギ、チーズなど、たくさんの食材が用意されており、私たちは最初、それらの食材を串に刺す作業を手伝った。彼らとは英語、中国語、日本語のそれぞれをおり交ぜてコミュニケーションし、自己紹介の後には、日本を訪れたことのあるという何人かによる日本でのエピソードなどに耳を傾けた。また、食材を焼く作業にも参加させてもらい、「熱い、熱い」と言いながらも、ともにバーベキューを楽しんだ。



▲台湾ソーセージを手にとり記念撮影



▲バーベキューの様子

このように異国の地で、現地の季節の行事に、その地に住む人々とともに参加することのできたこの経験は、その希少性からというよりはそこでの人との出会いの偶然性に、感謝する思いである。私自身は台湾を訪れるのは今回が三度目で、以前は旅行としての訪問であったのだが、そのどちらでも台湾の人々の、異国の者すなわち「他者」への受容性の高さを感じる事が多々あった。それは、多重民族社会であり使用言語も複数存在するという、異種混交を基調とする台湾社会そのものの成り立ちが背景にあるのだと想像される。だが、そうした「他者」への寛容さ、ともすれば「友好的」と変換される異文化への態度を、私たち日本人が単に「親日」と解釈するにとどめるのではあまりにも釈然としないのである。

そのような思いは、例えば、今回訪問した一つである歴史文献館で、日本語の堪能な高齢の台湾人男性が展示物を案内した際などに生じた。台湾の歴史、特に、日本による統治が行われていた時代に関して、包括的というよりは、ある特定の出来事を取り上げた説明がなされたといった印象が残った。それは単に、膨大な展示資料に対する時間的な制約、あるいは私たちが「日本人の訪問者」であることへの配慮からなされた行為である可能性がまったくないわけではないが、日本と台湾の歴史や歴史認識問題を考えるうえで、そうした行為やそこでの語りや、展示物を見る「歴史を知らない」現代の学生に、少しの違和感もなく受け入れられてしまい得る状況そのものに、少なからず疑問が生じた。

また、別の日に訪れた景美人権園區で触れた、白色テロに代表される台湾での人権侵害の歴史、加えて、台湾独立運動を展開し言論の自由を訴えた鄭南榕のような人物の存在を知ったことで、台湾とその歴史をめぐる現在の日本の向き合い方、あるいは台湾への認識そのものに危惧を抱いた。その一方で、私自身としては、日本人である自分たちが他国の歴史に触れる際には常に、日本は民主主義国家であるという前提のもと、まるで「自分たちは安住の地において、それが侵されることはない」といった態度でいるのではないかという気付きがあった。つまり、現状としてあるのは、私たちは歴史問題やそれに関わる事象に対して、依然として他人事であるという認識を脱していないということである。政治的弾圧や言論の自由が奪われるような危険が生じるか否かにかかわらず、そうした事態に機動的に対応しうるのか、また、人権という普遍的価値が希求されるものにどう向き合っていくのか。台湾は観光地のイメージとともに消費されるだけの場所ではなく、歴史と社会との向き合い方を私たちに問う地なのである。今回のスタディーツアーを介し、そうした新たな視点を得た。

長期にわたる政治的弾圧と人権侵害の歴史を経て、その覆轍を踏まないという意志のもと実行に移された台湾の民主化は、同時に「台湾は台湾である」とする台湾ナショナリズムの台頭をともなうものであった。そうしたナショナリズムが生じたことは、複数の民族が並存する台湾社会にとって大きな変化であったことは想像に難くない。だが、街やそこで暮らす人々に触れるなかで感じた、異なる文化や価値観に対する寛容さは、多種多様なものが入り混じる台湾だからこそ持つ独自性であると考えられる。台湾の人々から感じ取った異文化理解のあり方、そして台湾というその地から学んだ歴史と向き合う姿勢を、日本人の一人として受け止め、また、今後の自身の学びのなかに活かしていきたい。